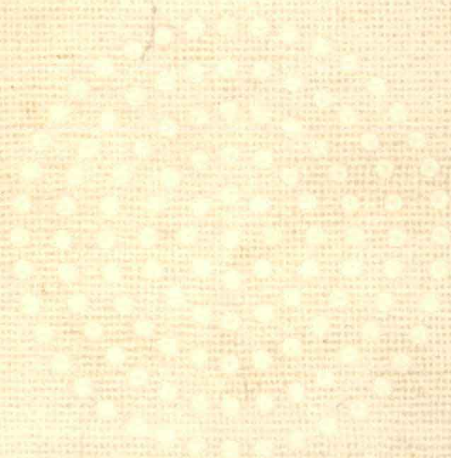
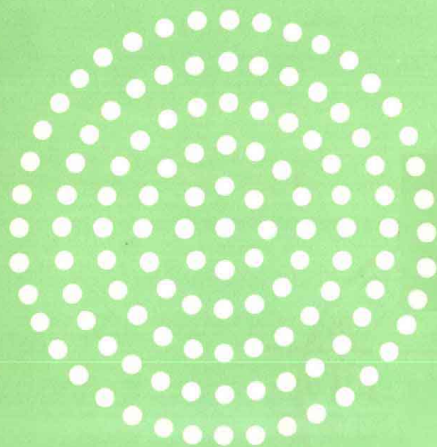




THE  
LIBRARY  
OF THE  
MUSEUM OF  
ART AND  
ARCHAEOLOGY  
OF THE  
UNIVERSITY OF  
CHICAGO  
1100 EAST 58TH STREET  
CHICAGO, ILL. 60637  
TEL. 778-4131  
FAX 778-4131

日本の詩集 4

# 高村光太郎詩集





昭和四十三年五月十日 初版発行  
昭和四十九年六月三十日 七版発行

著者 高村光太郎 たかむら こうたろう

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三  
番東京一九五二〇八(郵)一〇二  
電話東京(二六五)七二二(大代表)

日本の詩集 4 高村光太郎詩集

印刷カラー 暁美術印刷株式会社

本文 文旭印刷株式会社

函・扉 暁美術印刷株式会社

製函 川合紙器加工所

製本 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

0392-571904-0946(2)

目次



道  
程

生けるもの

画室の夜

亡命者

寂寥

声

## 新緑の毒素

廃頽者より

髪を洗ふ女

地上のモナ・リザ

父の顔

泥七宝

友の妻

人  
に

或る夜のころ

犬吠の太郎

さびしきみち

冬が来る

郊外の人に

人類の泉

よろこびを告ぐ

冬の詩

牛

道  
程

群集に

秋の祈

道  
程  
以  
後

無為の白日

丸善工場の女工達

雨にうたるカテドラル

ラコツチイ マアチ

## 米久の晩餐

冬の送別

五月のアトリエ

落葉を浴びて立つ

鉄を愛す

猛獸篇

清廉

白熊

傷をなめる獅子

狂奔する牛

合

象の銀行

苛 察

ぼろぼろな駝鳥

猛獸篇 時代

車中のロダン

後庭のロダン

火星が出てゐる

冬の奴

花下仙人に遇ふ

或る墓碑銘

冬の言葉

触 知

旅にやんで

その詩

首の座

上州湯檜曾風景

上州川古「さくさん」風景

或る親しき友の親しき言葉に答ふ

刃物を研ぐ人

似 顔

もう一つの自転するもの

ばけもの屋敷

村山槐多

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

鯉を彫る

孤 坐

詩集 智恵子抄

樹下の二人

夜の二人

あなたはだんだんきれいになる

あどけない話

同棲同類

風にのる智恵子

千鳥と遊ぶ智恵子

値ひがたき智恵子

山籠の二人

レモン哀歌

亡き人に

梅 酒

荒涼たる帰宅

うた六首

元素智恵子

メトロポオル

案 内

あの頃

報 告 (あなたのきりひな)

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

詩集 典型

雪白く積めり

暗愚小伝

転調

バリ

反逆

親不孝

デカダン

蟄居

美に生きる

おそろしい空虚

二律背反

ロマン ロラン

炉辺

解説

評伝

鑑賞

詩の旅

年譜

報告(智恵子に)

山林

山荒れる

鈍牛の言葉

典型

田園小詩

山口部落

別天地

典型 時代およびその以後

女医になつた少女

山の少女

山のともだち

十和田湖畔の裸像に与ふ

宗 左近 三三

吉田 精一 二五

大竹 新助 二六

二六

写真協力

近藤竜夫・坂口嘉朗・白旗史朗・高村規  
布施正直・山口仁三郎・薬品実・オリンピックレス

高村光太郎詩集







詩集  
道  
程



## 失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて

「よき人になれかし」と

とほく、はかなく、かなしげに

また、凱旋の將軍の夫人が偷視の如き  
冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

しづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被はれたる煤色の仮漆こそ

はれやかに解かれたれ

ながく画廊の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ

敬虔<sup>けいけん</sup>の涙をたたへて

画布<sup>えふ</sup>にむかひたる

迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ

ああ、画家こそはかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀<sup>けんぼう</sup>の力つよき

昼みれば淡緑に

夜みれば真紅<sup>しんく</sup>なる

かのアレキサンドルの青玉<sup>せいぎよく</sup>の如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂<sup>おびやか</sup>を脅し

我が生<sup>せい</sup>の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇<sup>くちびる</sup>はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の真珠の如き

うるみある淡碧の齒をみせて微笑せり  
額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をのき  
逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後かげの慕はしさよ  
幻の如く、又阿片を燐く煙の如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、記念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

## 生けるもの

何事も戯たはむれにして、何事も戯ならず

戯ならずと言はむにはあまりに幼し

戯なりと言はば自ら悲し

我われも生いけるものなり

公園に散る新聞紙の如く

貧く、あぢきなく、たよりなく

雨にうたるまで

生けるものをして望むがままに生かしめよ

## 根付の国

頬骨<sup>ほほぼね</sup>が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付<sup>ねつけ</sup>の様な顔をして  
魂をぬかれた様にぽかんとして

自分を知らない、こせこせした

命のやすい

見栄坊<sup>みえばう</sup>な

小さく固まつて、納まり返つた

猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様な、  
鰻魚<sup>うなぎ</sup>の様な、鬼瓦<sup>おにがわら</sup>の様

な、茶碗のかけらの様な日本人

## 画室の夜

暖炉の火は消えて

室の四すみよりいつとなく

寒さは電流の如く忍び入る

絹マントルの明るき光は瞬きもせず

物の色より黄を奪へり

乱雑なる画室の様のもの淋しさよ

今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば

絵具と画布とは児戯に近し

——芸術は唯巧妙なる約束の因襲なるを——

むしろシャヴンヌの画を嗤つて

一杯の酒に泣かむとす

寒さ烈し

冬の夜の午前二時



## 亡命者

わが心は蝕<sup>むしく</sup>へり

うつろに、くろく、しんしんと  
潮時<sup>しほとき</sup>来れば堪<sup>た</sup>へがたし

かの亡命<sup>ぼうめい</sup>の日の淋しさに

身を隠<sup>かく</sup>したる家なれど

猫の背<sup>せ</sup>よりもうつくしき

黒髪をもつ少女等は

むざんなる力もて

ゐたりけり

女とは悪<sup>あく</sup>しきものの名なるかな

わがうつろなる心は

この名によりて痛し

女とはあやしきものの名なるかな

わがおびえたる心は